

まだ見ぬ世界へ



美術だけにとどまらない 安らぎの空間

小川原脩記念美術館には、美術を難しいと感じる方でも楽しむことができる“秘密”があります。「小川原脩記念美術館友の会」の高橋宏幸会長に、話を聞きました。

「何もしない」ができる場所 そこは特別な世界

入口から長い廊下を抜け、扉が開くとそこには、まるで一枚の大きな絵画のような羊蹄山のある景色が待っています。美術館に一步足を踏み入れた瞬間から、非日常の空間へ。そこで、コーヒーを飲みながらぼんやりと外の景色を眺めているだけで、日々の疲れが癒されることでしょう。美術館では、絵画鑑賞だけではなく、「何もしない」という過ごし方もお薦めです。

同じ趣味を持つ仲間や 多くの知識と触れ合う機会

この町に美術館ができてから、美術を好きな人が近くに多くいることに気づきました。また、地域にゆかりのある作家を身近に感じられる場でもあります。そのような方々と知り合い、言葉を交わすことで知識の幅や人との輪が広がります。

町民待望のミュージアム その誕生から20年

「町に文化施設を増やしたい」町民の思いから始まった博物館建設構想は、平成3年に開基百年事業に組み込まれました。後に、町民による「町内在住の画家小川原脩の作品を後世に残そう」という動きの一方で、周辺の町で美術館建設の計画があったことから、それぞれの美術館を結ぶミュージアムロード参入に対する期待とともに、美術館建設への関心も高まり、町は美術館建設構想へと動き出しました。

以降、建設地の特定などさまざまな検討を重ね、小川原脩記念美術館は、町民の安らぎの場として、また、若手芸術家の育成や文化活動の活性化の他、観光資源としての可能性など、町民のさまざまな期待を受け、平成11年11月3日にオープンしました。

倶知安の風土と自身の経験から、独自の画風で多くの作品を生み出した小川原脩。その名を冠した美術館は、今年で開館20年を迎えます。

映画や音楽、お話しも 毎週土曜には催しが

この美術館では、各種展覧会の他、映画の上映や各地で活躍する演奏家によるコンサートなど、さまざまなジャンルのイベントを主に土曜日に開催しています。中でも、私が最もお薦めしたいのは、館長や学芸員の解説付きで美術を学ぶ講座「土曜サロン」です。初心者にもわかりやすい内容ですので、美術に少し興味があるという方には、ぜひ行ってもらいたいです。

誰にとっても充実の時間 まずは足を運んでみて

誰でも、子どもの頃は絵を描くことが好きはずです。しかし、成長とともに、何かのきっかけで「美術」というものに壁を感じてしまうのかもしれない。絵画になじみがない方や、美術館に行つたことがない方も、小川原脩記念美術館なら、きつと自分に合う楽しみ方が見つかると思います。まずは美術館という空間を楽しむことから始めてみませんか。

小川原脩記念美術館友の会 とは？

「小川原脩記念美術館友の会」は、同館を応援する人たちの集まりで、小川原作品の所蔵調査などを行う他、週に一度、館内において、情報交換をしています。誰でも気軽に加入できますので、興味のある方は美術館へ。

小川原脩記念美術館友の会
会長 高橋宏幸さん



おがわら しゅう
小川原 脩 1911 - 2002

1911（明治44）年1月21日、北海道虻田郡倶知安村（現倶知安町）に生まれる。北海道庁立倶知安中学校（現倶知安高校）卒業、1930年東京美術学校（現東京藝術大学）西洋画科入学。在学中に「納屋」（1933年）が帝展に入選。卒業後、福沢一郎らと出会い「美術文化協会」などの結成に参加。戦時中は、軍の命令により戦争記録画を制作する。戦後は、郷里倶知安に戻り、「全道美術協会（全道展）」の創立に参加。1958年、「麓彩会」を創立。60歳を超えてから訪れた中国、チベット、インドで創作の新境地を切り開く。



絵画鑑賞を通じて 新しい自分に出会う

まずは、作品の題名や説明を見ることなく、この絵を見てみましょう。何も難しいことはありません。作品を通して対話を自由に楽しみながら、この作品の世界に入り込んでみませんか。

2 何をしていますか

この犬たちは、それぞれ何をしていますのでしょうか。歩いている犬、遠吠えをしている犬、こちらを見ている犬、遠くを見ている犬・・・視線の先には何があるのでしょうか。

4 想像してみましょう

次は、この絵のストーリーに迫ります。この犬たちは、どこかに行く途中なのか。遠くの仲間を呼んでいるのか。鑑賞に不正解はありません。作品とじっくり向き合うことで、見えなかったものが見えてきたり、新たな物語が見えてきたり。絵の外側の風景が見えてきませんか。

この作品について

「丘の上の犬たち」
1979年 小川原脩画

馬・犬・大白鳥など動物たちを生涯題材とした小川原脩。戦争画制作に協力した姿勢に対し、画家仲間から非難を受けた経験から「個」と「群れ」というテーマの追求は始まります。特に、群れの中での怒り・悲しみ・孤独の表情をした犬たちは重要な役割をもって描かれていますが、1979年の自身への赦しともなった中国への旅行以降、解き放たれたように清々しく穏やかなものへと変わり始め、本作はその変容の時期に描かれた一点です。

小川原脩の作品は、北海道立近代美術館をはじめとする美術館、官公庁や学校などさまざまな場所に所蔵されている一方で、これら作品をまとめて紹介する機会は、30年来ありませんでした。今回、開館20周年を迎えるにあたり、普段当館では見ることのできない作品を中心に展示します。激動の時代とともに変容する小川原作品の世界を、この機会にぜひご堪能ください。

開館 20 周年記念特別展

小川原脩の世界

8月10日～11月10日

小川原脩の想い

美術に触れることで “育つ” ちから

美術作品を見た時に受ける印象やとらえ方は、人それぞれです。自身の感じ方と他人のそれが必要しも同じとは限りません。美術に触れることは、多様な個性や価値観を受け入れる力の成長につながります。

「素朴な美術館ができればいい。絵は、描きたい人が描くよりしようがない。そんな気持ちの子どもたちにかき立てるような、敷居の高くない場所になってほしい」生前の小川原脩は、このような言葉を遺しています。小川原脩記念美術館では、その言葉のとおり、一人でも多くの子どもに美術を楽しんでもらうためにさまざまな取り組みを行っています。

個々の感性を大切に 小中学校で鑑賞体験



小中学生が図工や美術の授業で、鑑賞に取り組む手助けをします。美術館で作品を見ることだけでなく、時には出前授業として作品を学校に持って行くことも。複数人で話しながら作品をじっくり見ていく「対話による鑑賞」を行う子どもたちは、互いの意見を受け止めながら、作品の意味を見いだします。

描く・作るを楽しむ ワークショップ



指導経験豊かな講師を招き、描くことや作ることを「遊ぶ」ワークショップを開催しています。丸や線を描く単純な作業から始まり、塗る・切る・貼るなどを通じて、自由な発想を丁寧に引き出してくれる題材が魅力です。子どもだけではなく、大人が取り組むことで、新たな気づきがあるかもしれません。

故郷の景色を自由に描く ふるさとを描こう



(水口倅那さんの作品)

変化に富んだ後志の風景や豊かな自然に目を向けたこの地域出身の画家のように、子どもたちにも「ふるさとの姿をよく見てほしい」、「絵を描く機会を持ってほしい」との願いから始まった小学生向けの絵画コンクールです。現在、試験的に対象を中学生まで広げており、描き続けることを応援します。



8月31日まで 小中高生は観覧無料！

小川原脩記念美術館 (北6東7)

- 開館時間／9時～17時(入館は16時30分まで)
- 休館日／毎週火曜、年末年始、展示替え期間不定休
- 観覧料／一般500円、高校生300円、小中学生100円
(10名以上の団体料金は、一般400円、高校生200円、小中学生50円)
- 小川原脩記念美術館 ☎ 21 - 4141